

## 近代歴史地理研究の課題

—大城直樹報告・関戸明子報告によせて—

中西 僚太郎

### I. 大城直樹報告へのコメント

大城報告では、近代の場所解釈をめぐる概念的考察と沖縄村落の事例報告があった。報告全体に関わるコメントとしては、前半の概念的な考察が、後半の事例報告の内容とどのように有効に関わるのか十分な説明が欲しかった。

近代の場所をめぐる概念的考察の意義は十分にあると思われる。実証的研究とは別次元で、概念あるいは理論そのものを純粹に議論すること自体、地理学において研究ジャンルとして存在し得るし、意義深いものであろう。ただし、歴史地理学の場合、日本の研究は実証的なものが大部分なので、社会地理学からのアプローチによって社会地理学者と歴史地理学者が有効に対話するには、概念的考察が実証的研究とどう関わるのか、概念的考察をふまえることによって、実証的研究にどのような新知見がもたらされるのかについて、十分な説明が欲しいところである。

事例としてあげられた、沖縄の大宜味村喜如嘉の村政の変化や景観形成に果たした青年団の役割などの話は、内容そのものは興味深く、従来の自治体史などでは扱われていないことかもしれない。しかし、その解釈において、新たな概念や捉え方を用いることにどのような有効性があるのか、私には十分に理解することができなかった。別の言い方をすれば、用いられる言葉、用語の新しさは、内容の新しさなのだろうかという疑問を感じた。

報告を聞いて、私なりに喜如嘉の村政の動きを解釈するならば、1920年代に都市などの外部世界へ、工場労働者や大工などとして出かける若者が増加し、それによって新しい思想や生活感覚が村に持ち込まれ、そこに指導者が加わり、1930年代に村政革新運動が生じたが、弾圧によって挫折し、1940年代には国家の側に取り込まれていったということであろう。そして、思想的な左から右への転換は、個人レベルではしばしばみられることであり、ある種の集団志向的な思考様式の展開が、村レベルにおいても認められたと理解できるように思われる。

報告では、「赤の村」から「翼賛村」への村政の動きは、「村人が主体的行動としてモダニティを希求した結果」と説明とされたが、その捉え方によって何が新しく解明されたことになるのかよく理解できなかった。そもそも、「モダニティ」とは何かについても、十分な説明がなかったように思われる。そして、村の景観に関して、青年団によって聖地であるヒンバームイに鳥居や階段が設けられたりしたことが取り上げられたが、そのこと自体（近代になって本土の影響で鳥居が設けられたこと）は、一般的に知られていることであり、現在の風景から、忘れられていた記憶を見出したとはいえないと思う。あるいは、報告者の意図は、記憶の発見というよりは、「ナショナルな表象がローカルな施設に接合し得た時代があった」ということの例を示すことにあったのかもしれないが、そのよ

うな捉え方（あるいは概念化、または言葉・用語の使い方）は、「沖縄では本土の国家神道の影響を受け、ウタキに鳥居が設けられた時代があった」という捉え方と内容的にどのように異なるのであろうか。

また、公式の実定化された歴史に対して、記憶や景観から、近代の経験を丸ごと捉えるアプローチの必要性を主張されていたが、従来の民俗学的研究や、聞き書きによる民衆史<sup>1)</sup>などでも同様のアプローチがなされてきたといえるのではないだろうか。そもそも、ここで対置される公式の歴史や実定化された歴史とはどのようなものであろうか。政治家の認識する歴史や、自治体史がそれにあたるものかもしれないが、議論の対象とすべき研究者レベルの歴史は多様な内容をもっており、公式とか実定化という概念では捉えきれないように思われる。

ところで、喜如嘉の事例に関して、報告では取り上げられなかったが、村の購買組織としての「共同店」の存在が地理学的には興味深い。大宜味村や国頭村など沖縄本島北部では、なぜ今日まで近代の産業組成的組織である「共同店」が続いてきたのであろうか。「共同店」は、経済地理学的には市場経済の浸透度や個人資本の未発達などによって説明されるのかもしれないが、そのような説明とは異なる地域の社会的特質を絡めた説明が求められよう。そのなかで、近代から現代に至る喜如嘉の特質の一端が解明できるのではないだろうか。

また、沖縄の村落を題材とする場合、仲松弥秀氏の研究を無視することはできないであろう。『神と村』<sup>2)</sup>に代表される仲松氏の研究は、沖縄研究の枠組みのなかでは大きな評価を受けていると思われるし、地理学のなかには、欧米に先駆けて日本で独自に展開した人文主義地理学的な研究であるとの高い評価をする研究者もある<sup>3)</sup>。報告者の整理によると、新しい社会＝文化地理学は、人文主義地

理学が主体の社会的構成を棚上げしているとして、主体のポジショナリティ（ジェンダー、年齢、エスニシティなど）、社会生活の政治的・経済的側面を問う立場にあるとされる<sup>4)</sup>。私なりに簡単に言い換えると、主体の社会的位置や階級性、政治権力、経済生活との関わりを問題とすべきということであろう。それに対して、祖先の愛と子孫のそれへの信頼に基礎をおく仲松氏の沖縄村落の捉え方（仲松氏はそのような村人の精神構造が村落形態に反映しているとする）は、非常に牧歌的な印象があり、村落内に存在したであろう階級間の争いや経済的諸関係、政治権力との関わりなどを問う視点は欠落している。そのため、新しい社会＝文化地理学の立場からは、格好の批判の対象になるように思われる。沖縄の村落を事例として取り上げるならば、報告者は仲松氏の研究をどう評価するのか、是非聞きたかったところである。

## II. 関戸明子報告へのコメント

関戸報告では、草津温泉を事例として、近世から近代（昭和戦前期）における鳥瞰図の種類について説明があり、描かれた内容の分析結果が示された。まず、鳥瞰図の種類に関して、報告では検討の対象外とされたが、草津温泉では吉田初三郎タイプの鳥瞰図がどの程度あるのかが気になった。

私見では、近代日本の鳥瞰図にはおおよそ二つのタイプがある。一つは、明治中期以降に刊行された近世の名所図の改良版ともいべき図で、名所図の表現内容・構図をふまえながら、銅版もしくは石版印刷によって作られたものである。それらの図は、木版印刷とは異なる精緻な描写をもっており、草津温泉鳥瞰図の場合、明治末から大正期の鳥瞰図にみられるように、「真景図」という名称が特徴的に用いられることから、評者は近代の「真景図」と総称できると考えている<sup>5)</sup>。もう一つは、吉田初三郎に代表される鳥瞰図で、大

正期（主として大正後期）以降に登場し、横長の画面のなかに対象が自在にデフォルメされて描かれているものである。そして、特定の温泉地や都市、社寺など、比較的狭い範囲を対象として描く近代の「真景図」に比べて、吉田初三郎タイプの鳥瞰図は、同じ対象を描いても、近隣地域を含むより広い範囲を描く傾向がある。

このような近代日本の鳥瞰図のうち、報告で取り上げられたのは、近代の「真景図」に相当する鳥瞰図であったといえるが、草津温泉を描いた（あるいは草津温泉が含まれる）吉田初三郎タイプの鳥瞰図はどの程度あるのかが知りたいところである。というのは、上記の二つのタイプの鳥瞰図は、近代の観光のあり方と関わっていると考えられるからである。

私見では、近代日本の観光には、明治20年代と大正後期（1920年代）に画期があるように思われる。前者は鉄道の開通や汽船の就航など、新たな交通手段の出現により、近世以来の「旅」が、その延長として近代の「旅」に変化していく時期である。後者は、第一次大戦期の経済発展を経て、社会全体が豊かになり、大衆消費社会の先駆ともいえる状況が生まれ、現代的な観光の端緒がみられるようになる時期である。この時期には、都市人口が増大し、交通に関しては鉄道の利用者が顕著に増え、自動車も一般に登場するようになる。また、電力が広く普及するようになるのもこの頃以降である。あえて言葉を区別して使うならば、観光現象が、それまでの近世の「旅」の延長から、現代につながるツーリズムへと変化していくのが、1920年代以降ではないかと思われる。なお、ここで言う「旅」とツーリズムの違いについては、さまざまな側面があると思うが、社寺参詣の場合は信仰との結びつきの強弱、温泉地の場合は療養か歓楽か、あるいは団体旅行の有無などがあげられるであろう。

そして、このような近代の観光のあり方は、先にみた鳥瞰図のタイプとおおよそ対応しているとみることができる。つまり、近代の「真景図」は、近代の「旅」に対応して作成されたものであり、吉田初三郎タイプの鳥瞰図は、ツーリズムに対応して作成されたものと考えられる。草津温泉に関して、大正期以降においても作成された鳥瞰図の多くが近代の「真景図」のタイプであったとするならば、同時期の草津温泉の観光が、近世以来の「旅」の延長、すなわち、療養であったことを意味するように思われる。実際のところ、草津温泉は今日では華やかな観光地としてのイメージがあるが、昭和戦前期までは病氣治療の温泉地としてのイメージが強く、それからの脱却が第二次大戦後の草津温泉の課題であった<sup>6)</sup>。

このような草津温泉と対比して興味深いのは別府温泉である。別府の場合、第二次大戦前から草津に比べると現代的な歓楽型の観光地化が進んでいた。その別府に関しては、吉田初三郎の著名な鳥瞰図があり、亀の井ホテル店主の油屋熊八が初三郎と組んで、大だに別府を観光地として売り出して行ったことはよく知られている<sup>7)</sup>。吉田初三郎タイプの鳥瞰図が、現代につながるツーリズムの形成と結びついていたといえる好例であろう。逆に、別府では近代の「真景図」にあたる図は、あまり見出せないようである。もっとも、これは近代の「真景図」が、評者の知る限りでは、東日本（主として関東、東北）に多く、西日本に少ない傾向にあることが関係している。その理由は一概には説明できないが、絵師や印刷技術者の存在の多寡に影響された面があったと思われる。

なお、鳥瞰図を資料的に扱う場合、作成主体が誰かが重要な問題となる。具体的には、鳥瞰図の注記に著作者、発行人などとして記載されている複数の人物のうち、誰が作成に当たっての中心人物であったのかという問題で

あるが、それを特定することは案外に難しい。報告者には、作成主体の特定に関してどのような方法が考えられるかについて意見を聞きたかった。

(筑波大学)

【注】

- 1) たとえば、岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史 第1～5巻』草風館, 1990, など。
- 2) 仲松弥秀『神と村』梶社, 1990 (初版は, 琉球大学沖縄文化研究所, 1968。二版は, 伝統と現代社, 1975)。
- 3) 中俣 均「もう一人の沖縄学の父—仲松秀弥の学問—」沖縄文化研究33, 2007, 1-29頁。中俣は人文主義地理学という用語は用いていないが、「(仲松の沖縄村落研究を指して) こうした景観に潜む象徴的意味の分析 (=読み取り) が主題として確立してゆくのは、欧米の地理学においても、1970年代半ば以降のことである。仲松の景観論は、世界の最先端を行っていたのである。」(8頁)と評価しており、人文主義地理学的な研究の先駆とみなしているといえる。
- 4) 大城直樹「第4章 空間から場所へ」(吉原直樹・斉藤日出治編『モダニティと空間の物語 シリーズ社会学のアクチュアリティ: 批評と創造4』東信堂, 2011), 121-151頁。
- 5) 中西僚太郎「明治・大正期の巖島を描いた鳥瞰図」歴史人類38, 2010, 58-82頁。
- 6) 山村順次『草津温泉観光発達史』草津町, 1992。
- 7) 湯原公浩編『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社, 2002, 102-104頁。